



英雄復活(中)
ファントム戦士伝説 6
竹島 将

えいゆうふつかつ
英雄復活(中) ファントム^{せんしでんせつ}戦士伝説 6

たけしましゅう
竹島 将

© Kuniko Takeshima 1991

1991年2月15日第1刷発行



講談社文庫

定価はカバーに
表示してあります

発行者——野間佐和子

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112-01

電話 東京(03)3945-1111(大代表)

Printed in Japan

デザイン——菊地信義

製版——株式会社廣済堂

印刷——株式会社廣済堂

製本——株式会社大進堂

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。
送料は小社負担にてお取替えます。なお、この本の内
容についてのお問い合わせは文庫出版部あてにお願いい
たします。(庫)

ISBN4-06-184838-0

江苏工业学院图书馆

講談社文庫

藏書章

英雄復活(中)

ファントム戦士伝説 6

竹島 将

講談社

The Legends
of
Phantom Fighters Return
VI

目次

昂り続けた時間 ^{とき}	7
涙を忘れた女	67
ゴルシチョフ	92
一度、死んだ男	109
呪縛	135
南米作戦	157
わかちあう心	196
地獄の底へ	258

本文イラストレーション 末弥 純

英雄復活(中) || ファントム戦士伝説 VI

たかぶ
昂り続けた時間とき

どだい人生なんてものはそんなものさ。

いろいろ考えてみたところで何もなりやしない。

ただ、笑って過ごせばすぐに終わっちまう。

女はまさにそんな顔で笑っていた。

狂ったように声を出して笑っていた。

浅黒い肌の女だ。

乱れた黒い髪。黒い瞳。野性味を感じさせる太い乳首の豊かな乳房が、引き裂かれた赤いワンピースの中に見えている。

スペインとインディオの混血メステイソの女。

両手を持ち上げる。

赤い液体が、広げた指の間からしたたり落ちていた。

すると、その液体の後を追って、細長いぬめった光沢を放つ物体が滑り落ちていく。

それは生命体のようにも見えたが、女が両手を握り締めたときに指の間にぶら下がったことで

何であるかが判った。

腸だ。

人間の大腸だ。

女は両手にそれをぶら下げると、笑いながら、グルグルと振った。

腸の表面に付着していた血が振りまかれ、笑う女の顔にへばりつく。

それでも女はひたすら笑い続けていた。

女は死体の中に立っていた。

無数の死体だ。

熱帯樹林のジャングルの中に無数の死体が転がっていた。

腐敗し始めたものもある。

首が取れた者。背中を背骨が見えるまで切り裂かれた者。足をもぎ取られた者。両腕を引き千切られた者。顔面がつぶれた者。眼球が飛び出して、視神経だけでつながっている者。そして、切り開かれた腹から内臓が飛び出している者。

蟻がうごめいている。

蛭がへばりついている。

蠅が渦を巻くように飛んでいく。

中米、ニカラグアの雨季の終わり。

「サンディニスタ政権軍、反政府ゲリラのコントラ・グループが無差別に殺害されています」

声が聞こえた。

「数は？」

「無数です」

女がふいに歩き出す。

ジャングルの中の死体の海を彷徨^{さまよ}うように、踊るにも似た足取りで歩いていく。

「無数？」

「ええ。判っていることはこの殺戮^{さつりく}をたった一人の男がやったことです」

「一人の男？」

「名前も、国籍も不明です。男がアジア人らしいということは判っています」

「どうしてそう判るの？」

「この殺戮を目撃した何人かの人々が同じ言葉を口にしていました」

壁に填^はめこまれた一〇〇インチの巨大スクリーンが殺戮現場の映像を延々と映している。

「それはこんな言葉です。黄色い悪魔がたった一人で殺^やったんだ。たった一人でみんなを殺し

た」

「黄色い悪魔。黄色人種ってこと？」

「我々はそう理解しています」

答えの代わりに疲労感を滲^{にじ}ませた溜め息が一つ、つかれた。

そして、その疲労感を受け継ぐ形でその女性が言った。

「そう……理解している……ね」

ナターシャ・ヘニングスは華奢な肩にかかったプラチナ・ブロンドの髪を、細い指先で軽く撫でると、指を上げ、VTRスクリーンの映像を切るように指示した。

VTRスクリーンが切れ、同時に室内が明るくなる。

毛羽立ったペルシャ絨毯の中でかろうじて際立つ赤が、光の中に心ばかりの鮮やかさを放つ。
ロンドン。

アウター・アームズ社。

会議室。

中央のマホガニーのテーブルの最も奥に座るナターシャが小さく溜め息をつくとき、物思いにふけるように視線を中空に馳せた。

数秒そうすることで、室内に静寂が下りてくるのを待っているかのようなようだった。

世界的武器商社アウター・アームズ社の若き女社長であるナターシャ・ヘニングスの表情には数秒間に、自分の考えをまとめてしまったような落ち着きが生まれた。

カップを陶磁器の皿に置く硬質な音が聞こえる。

長く陽ざしにさらされて色褪せた厚いカーテンが窓を飾る、年代物の会議室には相応しい音だ。

ナターシャが顔を戻す。

彼女の真向かいに、落ち着いた聡明さを、顔に刻んだ皺の多さで物語る男が座っていた。

ナターシャが彼の前に置いてあるものと同じロイヤル・コペンハーゲンのカップを手にとり、まだ熱さが少し残った紅茶を口に含んだ。

「言いたいことは同じですか」

男が言った。

ナターシャが小さくうなづく。

男の持つ折り紙つきの冷静さを物語るのか、この会社を設立したナターシャの夫である故ダニエル・ヘニングスの親友であり、有能な右腕であり、もちろん今も彼女の最も信頼をおける参謀のハマー・オースティンは唇の端を僅かに歪めただけだった。

オースティンがVTRスクリーンの前に立っている部下に右人差し指を立てて、下がっていいことを示した。

部下は丁寧にならずくと、テーブルに置いた書類をまとめ、部屋から立ち去っていく。扉の閉まる音が室内に響き、微かなエコーとして残った。

「タカオ・ヤザワですね」

オースティンの言葉にナターシャが再びうなずいた。

「それ以外に考えられる？」

「いえ」

「あの忌まわしいマダム・マヌーのドール（人形）達でもこれほどのことはできないわ」

ナターシャが言いながら、目の前に置かれた書類をめくった。

「殺害の凶器はナイフだと推定される。刃渡り約二〇センチ。タイプとして考えられるのはサバ
イバル・ナイフ」

ヘニングスを見る。

「これだけで千数百人を殺害した」

ナターシャが肩をすくめて、再び疲労感を滲ませる溜め息をついた。

「マシン・ソルジャーでも、デビッド・ビンセントでも、マダム・マヌーでも、マダム・マヌー
ズ・エンジェルでも、そんなことはやれない。やれるのはまさにそれ以上の圧倒的な戦闘力を保
持した者だけ。破壊力が単に人間の形をなしているだけの存在」

「思いたくはないですね」

「ええ。確かに思いたくはないわ。でもね、そんな存在として生命を持てる者はタカオ・ヤザ
ワ、フアントム1しかない」

「でも、彼には魂があった。戦士としての尊厳と自尊心があった」

オースティンの口調には、彼には珍しく、少年が憧れの存在を語るような、奇妙な切なさがあ
った。

「ハマーは彼が好きだったから」

ナターシャが茶目っ気のある笑みを微かにもらした。

オースティンが吐息でふんと笑い、テーブルの上のカップをゆっくりと右手で弄ぶ。もてあそ

「そうね……」

ナターシャがそうつぶやいて、テーブルの上に両手を組むと、その上に顔を置き、夢でも見るかのような眼差しを中空へ馳せた。

「ダグはタカオ・ヤザワの話をするとき、まるで子供が大好きなスポーツ選手のことについて語るみたいに、いかにも嬉しそうに話していたわ」

「彼もタカオ・ヤザワを好きでしたから。私以上に」

ナターシャがその言葉に和らいだ笑みを浮かべた。

今まで緊張していた室内の空気が打ち解けたものになっていく。

「そうね。いつもタカオ・ヤザワの話をするときが、ダグの一番楽しい時間だったみたい」

ナターシャが片手を大袈裟に振る。

「ヤザワがどうした、こうした。ヤザワが戦闘機をこう扱って」

ナターシャがそこで言葉を切り、オースティンに微笑んだ。

オースティンが穏やかに笑ったが、ふいにその瞳に宿る和やかさが、荒涼感に変わる。

そして、その荒涼感が表情に広がっていく。

「タカオ・ヤザワ……ですか。今は単なる殺戮者になってしまった、かつての戦士」

「マダム・マヌーにコントロールされているのかもしれないわ」

「でも、昔の彼だったら、そんなことは決してなかった」

「昔の彼ではないのかもしれない。何らかのダメージを受けていて、そのせいで自意識が完全ではないのかもしれないわ。そこを付け込まれて」

「ナターシャ」

オースティンの口調は夢を語るようなものから、現実へ自らを引き戻そうとしている、いやに自制心を感じさせるものへ変わった。

「判ってるわ」

ナターシャがオースティンの言葉を遮る。

「いいえ、あなたは判っていない。今、目の前に登場しようとしているタカオ・ヤザワはまだ、完全にリカバリーしていないと思っている」

ナターシャが、言いたいことは判っているとばかりに小さくうなづく。

それでもオースティンが諭すような口調で言う。

「いいですか。これは極めて簡単な事実なのであり、今のあなたが忘れているものでもありません」

オースティンをナターシャが見つめている。

「タカオ・ヤザワは……」

ナターシャがふいにオースティンの告げる前に、溜め息をついた。

重い溜め息だった。

「一度、死んだはずの男です。そして、それをマダム・マヌーが蘇生させた。蘇生させたということは、かつての彼ではないということにつながります」

「そうね……」

ナターシャはそう言っただけで、溜め息同様に疲れた笑みを浮かべる。

「確かにそうね。タカオ・ヤザワはすでに以前の彼ではない。マダム・マヌーの人形^{ドール}として生きるタカオ・ヤザワ、生命を持つ存在としての世界最強の兵器となっている」

「そうです」

オースティンが微かにナターシャの口調に残っている感傷を振り切らせるためなのか、念を押すように言う。

「タカオ・ヤザワは今や戦士ではなく、単に兵器なのです。しかも、マダム・マヌーに操作され、我々に対抗してくる」

「我々……ね。何よりもユリに」

オースティンはその言葉に答えず、うなずいただけだった。

さすがにハマー・オースティンといえども、その言葉に冷徹な反応はできずにいた。

ナターシャがテーブルの上に立てた両手の上に自分の額を置くと、つぶやくように言った。

「もうすぐ彼女が帰ってくるわ」

ゆりはマダム・マヌーの七つの資金源の内、三つ目を叩きつぶし、帰還の途にあった。

三つ目の資金源、北アフリカ、スーダンの戦場から、ゆり達部隊を救出したオースティンはパリ郊外の飛行場に休養と補給のためにゆり達を下ろし、先にロンドンに戻ってきていた。

帰るとすぐに待っていたものが、ニカラグアから衛星通信で送られてきたこの映像だった。

アウトター・アームズ社の中南米エージェントの一人が話を聞きつけ、即座に現地へ飛び、撮影